

学業不振への自我心理学的接近

——自我防衛としての学習障害について事例をもとに——

東京教育大学

矢 吹 省 司

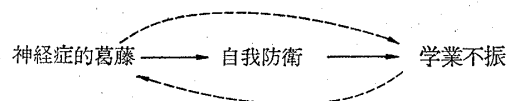
I 序

学業不振児といってもあらゆる面で不振状態にあるわけではない、ということがいわれている。たしかに、江口ら(1965)が述べている「学習面ではやる気がないが、他の場面(例えば、運動・クラブ活動など)では見違えるほど意欲をみせる不振児」の多くは、いわば正常な不振児であるといえよう。このような子どもたちの学業不振は、教授法の工夫や、学習技術の適切な指導によって、比較的容易に解決されるように思われる。しかしながら、治療教育の面でより問題にされねばならないのは、すべてにおいて生気がなく活動のエネルギー(意欲)そのものが欠乏している不振児であり、心理臨床の対象となるようなものであろう。事実、学業不振を人格的適応異常や神経症的なあらわれとしてとらえている研究(Wilson, M. R. et al. 1967, Norfleet, M. A. 1968, Teigland, J. J. et al. 1966)や、その治療教育の方法として directive method より non-directive method の方がすぐれているという報告(Sheldon, W. & Landsman, T. 1950)は少なくない。本研究の目的は、同様の立場から、そうした学業不振の状態像, Hartmann, H. (1958) のことばをかりれば学習活動が葛藤過程(conflicting process)を含んでいる状態への理解を、発達心理学的な視点を導入することによって深めることにあ

る。Erikson, E. H. (1950, 1968) は精神分析的自我理論にもとづき、発達課題に関する示唆に富む見解を提出した。彼は、ある発達段階において達成される自我特性を、次の段階の課題に対処する際の立脚地としてとらえている。この発想は、「根底的な適応行動は、すべてそのもっとも適当な時期に確立されねばならない」という認識にたち、教育心理学におけるレディネスの概念と似ているが、より包括的なパーソナリティのレベルに基礎をおいているという意味でより現実的であるといえよ

う。また Erikson は、個人の生活歴の各段階において、それぞれの自我の発展過程が成功した場合と失敗した場合とに分け、その結果を具体的に類型化して論じている。そして正常な精神発達が、初期の段階で得られる基本的信頼感を基点とする、自律性・進取性・勤勉・同一性といった諸感覚(sense)の推移を通して展開されることを明らかにした。

次の事例研究は、以上のような自我の発達論を基礎に、また Brunner, J. S. (1966) や Brunner, J. S., Sears, R. R. et al. (1966) によって唱えられた学習理論を参考にしながら、学業不振を文字通り「学業が不振である」とのみとらえ、その原因をその時点における一過的な学習の失敗に求めることの限界を示そうとするものである。



II 事例研究

事例1 Ak ♂ 来談時5才9か月

Akの両親の育児観は、「甘え」への極端な不安を特徴としていた。Akはかなり年が離れている姉2人兄1人の末子として生まれた。そのため両親は、ひとりっ子のような弱々しい子どもにしてしまうことを恐れて、極力甘やかさないように心がけてきた。おんぶ、だっこのような身体接触はできるだけ避け、3才ごろからは心身の鍛練のため、ブロックベイにのぼらせたり、富士登山に連れていったりした。そうした両親の期待にこたえてAkは、決して甘えることのない子どもになっていた。つらい目にあっても泣かないで、歯をくいしばってがまんをする。例えば、よごしたくつを下手ながらも自分で洗おうとする。しかし、このように一見できあがったかにみえた自律心・独立心も、幼稚園に通うようになってからその限界を露わにした。園でのAkは友だちにはほとんど関心を示さず、もちろん一緒にあそぼうともしな

い。他の子どもたちとくらべて、行動一般がひどく遅れていて、衣服の着脱から食事まで、独りでやろうとせず先生の手を借りなければならない。自宅でも、いちいち手をかけてあげないと前に進まないという状態であった。

母親につきそわれてクリニックを訪れた Ak から受けた最初の印象は、子どもらしい表情に欠けて、autism をうたがわせるようなものであった。知能検査をおこなうために遊戯室に入れたが、自分勝手におもちゃのところへとんでいって、検査者から「これからテストのおあそびをしましょうね」といわれても、まるで聞いていないという様子だった。特に言語性の分野ではまったくこたえられず、興味がなくなると部屋のなかをフラフラ動きまわる。しかしくわしく観察すると、反応がまったくないわけではなく、例えば「おめめ（お耳）はどんなご用をするの？」という問いに、目をパチパチさせたり、耳をピクピク動かしたりする。また動作性の分野で興味があるものだと、執拗にそれをくり返そうとする。結局かなりの時間をかけて、 $IQ=80+\alpha$ を得ることができた。なお検査終了後プレイをはじめるとベタベタ甘えてきた。

考察と経過：甘えに対して強い不安を抱いている親は、しばしば正当な甘えをも無視してしまうものである。脆弱な新生児にとって、母親からの無条件な愛撫を受けることは生きるための前提であろう。乳児は、身体接触のような具体的な表現を通して、母性（人間的なものの源泉）を感じとるものである。すぐさま彼らに独り立ちを要求することは、人間の発達というものが「アイデンティティとともに始まるものではない（Erikson）」限り、砂上に楼閣をつくるようなものであろう。正当な甘えの欲求は拒否されることによって消失するのではなく、受容され満たされることによってより現実的な信頼感情へと高められるのである。

「保護が過剰になってもいけないし、厳格に傾きすぎてもいけない」ということがいわれてきた。この種のモットーは、「保護」と「拒否」を単純に1つの次元上の両極端としてとらえており、しばしば誤った育児観のものになっている。特に育児者の意識のなかで、発達というものが無視されていたり、「こたえてあげること」と「甘やかすこと」が分化していないような場合には深刻である。しかるに Ak は、はじめから甘えることを拒絶され、足元がおぼつかないうちに塀登りや登山をさせられた。彼の inner structure は著しく無視され、おとなの側の structure が一方的におしつけられてしまった。そして「このようなおしつけには、自分はとても耐えられないのだ」ということを Ak は、何も示さない、触れ合

わない、関心を示さないといった自己閉鎖の様態を通して訴えたといえよう。こうした様態が autistic な現われでないことは、ひとたび受容的な雰囲気におかれると待ってましたとばかりしがみつきたい甘えてくることから明らかであろう。

したがって何よりもまず、両親が子どもに甘えられることに対して持っている不安を問題にし、自信を失い混乱してしまった育児観を回復させることが必要になる。母親との面接はこの観点から進められた。何回かの面接の後に母親は、「Ak は赤ちゃんの時代からやり直さなければならない。今までわたしは子どもの気持と全く逆のことをしてきたようだ」と考えるようになった。それにつれて Ak は、次第に本来の子どもらしさをとりもどし、簡単な身辺処理ならひとりですることができるようになった。このようにしておそまきながら形成されつつあった自律自発の感覚は、8か月後に行なった知能検査時の態度にもあらわれた。IQ change = +28 というすばらしい上昇を示し、108 の IQ を得ることができた。

その後 Ak は入学に際して一度は普通学級に入れられたが、やはり情緒的に未熟な面が目立ち、皆と同等についていくことがむずかしかった。精神薄弱という理由で、特殊学級においやられた。不幸中の幸いだが現在の彼は、therapeutic な受容的雰囲気のなかで楽しい学校生活を送りながら、本来の資質をますます高めつつある。来年度いかにして普通学級に復帰させるかが今後の問題として残されている。

事例2 Ya ♀ 来談時9才（小4）

Ya に関する当初の主訴は吃音である。彼女は小さいころから「親のいうことをよくきく素直なおとなしい子」だったが、反面神経質でおくびょうなところがあった。吃音は1年生の時の夏休みに田舎に行っている間に発症した。母親の話によると、「田舎の祖母（父方）はとてもきびしい人で、Ya は東京に帰りがついていたが、それを口に出して言えなかった」そうである。2年生の時にはほとんど治っていたが、3年生になってから再び発症した。母親は、「Ya がどもるようになったのは田舎のおばあちゃんのためだ」と訴えているが、たしかに吃音の結実因子としては無視できないだろう。しかし、吃音が一過性のものではなく、長期にわたって持続していること、及び1度はよくなったが3年生の時再発したことを考慮すると、どうしても親子関係の一般的様相（準備因子）を問題にせざるを得ない。「吃音児の親は概して完全癱が強く子どもに正しい行儀、清けつ、従順などを要求する傾向がある（高木四郎、1964）」といわれているが、このような観点から母親との面接を深めたと

ころ、次のことが分かった。

「Ya が生まれた時は家の商売が忙がしかったため、相手をしてあげる余裕がなかった。手のかからない子にするために泣いてもできるだけほっておくようにしていた。幼稚園に行くようになってからは、自分のことは自分でするという方針できびしく育てた」

なお学校の成績は、5段階評定でほとんど1または2で、芳しくない。担任の先生からは、「家庭で勉強をみてあげるように」と言われている。しかし知能検査（鈴木ビネー）を施行したところ、IQ=137を得て高い知的水準にあることを示した。検査時の態度としては、「固さと緊張がみられるが、よく考えよく答え、やろうとする意欲があり、忍耐強く努力する」などが特記された。

考察：乳児期における母子接触の不十分さから、Yaの基本的信頼の感覚がいかなるものであるかがうかがわれる。母親の愛情面に欠陥があったとはいえないが、少なくとも環境的要因による「与えること」への阻害は無視できないだろう。「母親は胸によって、また幼児の欲求に応じてやろうとする熱意に満ちた表情やその他の身体的部分によって生きかつ愛するのである（Erikson）。」泣くという感情表出は、快い母親の胸に抱きとめられるという具体的な表現を通して、確かな意味を附与される。しかるに Ya の母親は、育児に費される時間をできるだけきりつめることに、つまりわが子の無邪気な欲求をどう抑制するかに、主な努力を向けざるを得なかったのである。Ribble, M. A. (1943) のことばをかりれば、「本能の背後にある深い、かくされた事実を考慮に入れることを忘れたのだ」ということができよう。現在の Ya にみられる「素直なおとなしい」しかしながら「緊縮した」性格傾向は、こうした母親の態度（また Ya に内面化されたそれ）にその原型をみることができよう。基礎があいまいにされたままにおしつけられた自律・自発・勉強の感覚は、したがって砂上の楼閣であり、いわば無理強いされた良い子像である。この良い子像が真からのものでないことは、Ya から受ける「神経質で何かにおびえている」といった印象からもうかがわれる。そして Ya の自己抑制的な傾向は、このような不安定な自己像を維持するための防衛作用の現われであるようにも思われる。吃音は、このようにして形成された自己の感情意志の表現に対する強迫的な意識過剰性にその原因が求められよう。この観点から、吃音の結実因子として「東京に帰りがたかったがそれを口にだしていえなかった」というできごとがあげられていること、また「気心の知れた友だちの前ではほとんどどもらない」ということは、興味深いところである。

学業不振の発生過程は、以上のような心的機制との密接な関連においてとらえられよう。Ya が学業不振に陥っていることは、「やろうとする意欲があり、忍耐強く努力する」といった知能検査時の態度からみると、一見奇異なかんじがする。しかしながら、ここで注意を要するのは、前にもみたようにこの「意欲・忍耐・努力」が決して真の意味での勤勉感のあらわれではないということである。いわば生き生きとした自発感情を抑制されたことによる、防衛的な閉じられた忍耐努力のごときものであろう。検査時の「努力」が「固さと緊張」ともなっていたことに注意すべきである。以上の視点は、現在の Ya が、母親の態度の変化にともなって本来の子どもっぽい情緒をとりもどし、自律自発性を再確立するなかで、学習への意欲を回復しつつあることから確認されるだろう。

事例3 Iu ♂ 来談時9才（小3）

前の例とは異なり、「勤勉」はたとえ表面的にも認めることができない。母親の話によれば、Iuは「積極性に欠け、勉強しようとする気持が全くない。家庭学習についてはもちろんのこと、授業中でも先生の話の聞こえをしない。そのため成績は悪く、常にクラスの最下位に甘んじている。特に算数と体育は劣悪で、今の授業水準ではほとんどついていけない状態である。友だちづきあいが悪く、特に越境通学をしているためもあり、近所のあそび友だちはひとりもいない。帰宅後はほとんどテレビばかりみている。内にこもりやすく、学校であったことなどを決して自分から話そうとしない。気分がすぐれないときには、声をかけられてもムッとして、耳をかそうとしない（この傾向は特に顕著で、知らない人から難聴をうたがわれたほどである）。行動一般がのろくて、着衣もひとりで満足にできない。」

本人からは知的面に素質的な欠陥があるという印象は受けなかったが、確認のため WISC を施行した。検査に対する積極的な態度はみられなかったが、かなりの時間をかけて IQ=115+α の結果を得た。なお動作がにぶいため、スピードの要因を必要とする問題ではかなりのとりこぼしがあり、本来の力を十分に発揮できなかったように思われる。

父親は仕事（会社経営）の関係で外泊することが多く、帰宅時間も深夜になってしまう。従って、Iuと接触する時間はほとんどない。また、母親が Iu のことについて相談をもちかけても、「あまり心配しすぎるからいけないのだ」といってとりあおうとしない。父方の祖父母が同居している。隠居の身分で1日中家におり、母親によると「Iuをねこかわいがりにかわいがってきた」そ

うである。加えてお手伝い3人がいて、着衣、おもちゃのかたづけなど、身辺処理のほとんどをやってあげていた。母親は「これではいけない。過保護になってしまう」と何度か思ったが、祖父母に頭があがらず、ついにその思いを口にすることはできなかった。そして、「わたし自身、おじいちゃんやおばあちゃんの態度に流されて、過信託にしてしまった」と反省している。また彼女には、Iuが乳児の時義父母に「赤ちゃんをとられてしまった」という気持がある。

考察：ムツと口を閉じ話そうとも聞こうともしないことにみられるように、彼に特徴的な保持の様態 (retentive mode) は、情緒面を統制しつつ外界との交流を維持するのに必要な自律性・進取性の欠如を示唆している。開かれた世界への好奇心、遊戯への感受性は著しく抑えられている。

保護過剰が「信頼」を保証するものでないことはいうまでもない。Erikson がいうように、「初期の幼児的経験から得られる信頼の量というものは、食物の絶対量や愛情の誇示などよりも、むしろ母親との関係の質に、大きく依存するもののようである」また、「食物のみならず感覚的刺激をも、適当な量だけ、しかも適当な時間と与えてやるように配慮しなければならない」そしてなによりも、自分自身を確立している母親との充実した快い相互作用を欠くことはできない。そうでなければ、何でも受け入れたいという乳児の意欲は、混乱した防衛機制かまたは無感覚な状態へと変化してしまうかもしれないからである。しかるに Iu の場合はどうだろうか。もっとも重要な母親は困難な状況にあった。夫の度重なる不在、舅姑に対して自分の考えを主張することのできない肩身の狭さ、そして「赤ちゃんをとられてしまった」という疎外感等々……こうした母親の不安定な状態、それに加えて、基本的なパターンが稀薄にされた未統制な人間的刺激の過多・溺愛のおしつけが、Iuの基本的信頼の様相に深く影響したものと推し量られる。Iuの深刻な学業不振は、このような背景から理解されるだろう。

従って、Iuがこうした状態から抜け出すためには、曖昧にされていた基本的な人間関係のパターンを確立すること、つまり安定した親密な母子関係を回復させることが重要になろう。こうした配慮のもとに、自分のことは自分でするという身辺処理の自律化への働きかけが為されなければならない。なお、進取性の未熟さについては、遊戯療法が有効であるように思われる。実質的なセラピーは未だ開始されていないが、あまり協力的でない父、祖父母のことを考えると、早急な効果を期待することはむずかしいように思われる。

事例4 Km 女 来談時9才(小4)

「Kmに身体を触れられるとゾッとする」という母親のことばは、Kmの不幸な背景を物語っているのみでなく、母親自身の深刻な事情を示唆している。たしかに、筆者がKmを知るようになったきっかけは、「不眠、頭重、対人恐怖等」をわずらう母親の神経科受診にあった。彼女は慢性的な抑うつ状態にあった。Y-Gテストの結果は典型的なE型のプロフィールを示している。分析的面接を中心とする折衷法にて治療を受けることになったが、その過程で彼女は夫に対するひどくネガティブな感情を表明した。結婚前のKmの母親は、現在の夫とちがう男性と深い恋愛関係にあった。今でもそのひとつのことを忘れられず、両親によってむりやり一緒にさせられた夫を「まじめな人だ」とは思いながらも、心底から愛することはできなかった。上記の症状を訴えるようになったのは、結婚後まもなくのことである。このような不安定な状況のなかでKmが生まれた。「与える能力」を失いつつあった母親にとって、Kmの誕生は不幸なできごとであった。自分の娘に対する気持は、最初の出合いから拒否的で、通常の母親のそれではなかった。母親のこうした感情は、Kmが「虚弱で、夜泣きが多く、育てにくい赤ん坊だった」ということでますます強化された。その後もねつきがわるく、眠りが浅いといった状態が続き、落ち着きのない神経質な子どもになっていた。また集中力に欠けるため、入学後の成績は劣悪で、担任の教師から「やればもっとできるのだが」といわれたこともある。娘に対するネガティブな感情、及び娘自身にみられるさまざまな問題点を気にしはじめた母親は、Kmを伴って来所するようになった。Kmは利口そうな顔つきをした少女で、面接にもきちんとした態度で応じ一見何も問題がないような印象を与えた。ロールシャッハ・テストを施行したが、この年齢の子どもにはめずらしく、Mや濃淡に対する感受性が強く、FMは1つもみられなかった。対人感受性は冒されていないが、自己抑制的で、楽天性・自発性に欠ける緊縮的な性格傾向がうかがわれた。Abrams, E. N. (1955) のIQ公式から、 $125 \pm \alpha$ のIQが予想された。なお、テスト態度としては次のことが特記された。「たいへんおちついていて、検査者の指示に素直に答える。質問段階の説明の際には、図版を検査者の見やすい位置に置き、終わるときちゃんと元にもどす。おとなっぽい対人配慮がみられる。しかし検査終了後は、疲れてぐったりしている。」

考察：母親にとってもっとも大切な与える能力に欠き、わが子との最初の出合いに失敗し、夫への拒否的な感情を移入し、身体を触れられることに嫌悪感を示す母

親に、子どもの個人的欲求に対する敏感な配慮を期待することはおそらく不可能であろう。新生児は「かれが生まれてきたことを歓迎してやろうとする乳房の、母親の、および社会の多少は調節された能力と意志に出合うのである (Erikson)」といわれているが、このことにめぐまなかった Km は、彼女なりの感覚、世界に対する防衛的な態度を形成せざるを得なかった。自分の存在を全面的に受け入れてくれない、それどころが「ゾッ」としてしまう母親の前で「信頼」を確立することはできない。にもかかわらず当然のことだが脆弱な子どもにとって、母親から離された生活などは考えられない。むしろつき離されれば離されるほど、しがみつこうとする様態を身につけてしまうだろう。その結果 Km は、消極的で家(内)にとじこもりやすく、安心して眠りにつくことのできない神経質な子どもになってしまった。

なお Km に特徴的なこととして、対人態度の二重傾向が指摘される。無邪気に振舞うことは拒絶されることである……そのような彼女にとって、子どもっぽい欲求を満たされないままにおし殺し、おとならしさを演技するようになるのは当然であろう。来所時の Km と母親の間のやりとりは、第三者に「まるで他人同志のような」印象を与え、検査時にみられた Km の細かい対人(検査者)配慮は普通の子どものそれではなかった「反面、他の問題児との合宿生活では、今までおさえられていたものがいっぺんにせきを切ったかのように、付き添いのおとなたちにベタベタ甘えていた。基本的な信頼関係の欠如、統合されない情緒、緊張と弛緩の ambivalent な心的葛藤等々、こうした状態において十分な学業成績を得られないことはむしろ当然といえよう。「積極的に自分から進んでとりくむ (actively take initiative, Sears)」には、あまりにもその基点である「自信」に欠けており、防衛的な対人配慮のなかで畏縮している。なお、母親の不眠症・対人緊張は大部軽快したが、種々の都合で本質的なところはほとんど未解決のまま、本例との関係を切らざるを得なかった。

事例 5 Ca ♂ 来談時 17才(高2)

Ca は、自分の部屋のそうじ、学用品の整理など、ごく単純な身辺処理もひとりではできないほど自律心に欠けていた。学業成績は劣悪で、次の学年に進級できるかどうかのところで喘いでいた。

Ca は、一見明るく素直で思いやりがあり、人の気持ちを損うことを恐れるタイプの青年である。友だちづきあいがよく、学級委員に選ばれたこともある。反面、自分の技能、学業成績に関しては強い不安全感を抱いている。小・中・高を通して家庭教師についていたためか、独力

で学習方法を工夫しようとする自発的態度に欠け、本人も「どうやって勉強していいかわからない」と訴えている。また非常に依存的で、進級に関して「最後には誰かが救ってくれる」という意識がある。

小学4年の時、交通事故で頭を打ち、それ以来自分に都合の悪いことがおきると「頭が痛い」と訴えるようになり、もともと保護過剰気味だった母親の態度をますます強化してしまった。家庭が裕福なため、欲しいものならたいがいのは買ってもらえた。きれい好きで幾分神経質な母親は、Ca の部屋が少しでもちらかっているとさっさとかたづけしていた。彼女にとって息子は今だに赤児のような存在である。

父親は、会社で重要な役職についており、いわゆるエリートコースを歩んできた人である。Ca の成績には強い失意を抱いている。そのため息子には、自分の学生時代の自慢話を聞かせ、高圧的に叱咤することが多かった。たまに良い成績をとってきても、それを当然のこととして受けとっていた。なお、母親との面接が深まるなかで明らかにされたことであるが、彼女は、夫がワンマンで横暴に振舞うことがあったり、かつて浮気をしていたことなどからも、強い不満不信を抱いている。また舅(別居)は、「子どもが悪いのは母親が悪いからだ」という考えをもっており、そのことを直接いわれたこともあり、彼女の心的外傷の1つになっている。

大学受験準備中の姉がいる。彼女は Ca と異なり、「女の子だから」という理由できびしく育てられた。成績が良く、この点に関して弟 Ca に対してしばしば権威的になる。Ca 自身、姉に対する劣等感がある。育児方針が姉と弟で著しく異なっていたことも影響してか、2人の間には一種の断層がある。

考察と経過：幼少時から母親による保護過剰は、Ca の自律心の発達を著しく妨げた。しかもこの傾向は、交通事故をきっかけとして拍車をかけられ、Ca の自我の未熟さをますます根深いものにしてしまった。また、Ca の否定的な面にしか注目しようとしないう父親の態度は、彼の自己不全感を一層深刻にした。エリートコースを歩んできた強大な father image は、家庭における父親不在の傾向と相まって、Ca の男性同一化にとって欠くことのできない適切なモデルの欠如を示唆している。人の気持ちに取り入ろうとする彼の態度は、拡散した自己同一性を他者のまなざしを媒介にして回復させようとする努力のあらわれであるのかもしれない。「青年は、自己の勤勉の感覚を、ある一貫したパターンに集約させる必要がある (Maier, H. W. 1965)」といわれているが、Ca におけるこの感覚の欠如は、いわゆる働くことのマ

ヒ (work paralysis) を導いているといえよう。その他、父と母の、母と祖父の、また本人と姉とのネガティブな関係の微妙な影響も無視できないであろう。このように、学習意欲の抑制要因は多岐にわたり、悪循環のなかで相互に強めあっているようにも思われる。治療教育はしたがって、この悪循環を絶ち切る方向に向けられねばならない。具体的には、Ca の生活習慣の改善(自律化)をうながし、家族内の対話に心がけ、特に父親は Ca の状態像を理解し、否定面のみに注目することを改める等等が試みられた。また Ca 自身への家庭教育は、今までのように対症療法的な学習技術上の指導にのみ固執するのを避け、彼の悩み、特に状況の変化にともなう混乱を受けとめるようにつとめ、勉強を強制しないで自発性の発現を待つようにする。

家庭内の人間関係のありかたが、長年にわたって固定してきたことを考えれば当然のことだが、これらの方針は強い抵抗にぶつからざるを得なかった。きれいずきな母親はいけないとは思いつい手を出してしまう。優秀な父親は息子の劣悪な成績をみるとどうしても感情的になってしまう等々、さまざまな困難はあったが、自分たちの責任性への理解を深めるにつれて、少しずつ子どもたちに対する態度を改めるようになった。Ca 自身、徐々に自己の問題点への洞察を深め、少しずつ自律性ができてきた。現在セラピー開始後約半年を経ているが、学習意欲はようやく回復し、自発的に勉強の方法を工夫しようとする態度がみられつつある。今後の問題として多くを残しながらも、自我の未熟さはかなり改善されたといえよう。

事例6 Tm 女 来談時18才(大1)

「大学(短大英文科)入学後約3か月になるが、学業への興味は全くない。大学にはたまにしか顔を出していない。あせりはあるが、どうしても意欲がわいてこない。無気力・疎外感・ばくぜんとした不安におそわれ、しばしば胸を圧迫されるような心悸亢進に悩まされる。下痢や頭痛は慢性的になっている。」Tm は、以上のような主訴をもって、母親につきそわれて神経科を受診した。入学を熱望していた第一第二の志望校の入試に失敗し、現在籍をおいている大学は「すべりどめに受けた大学」である。また、ミッション系であるため、「その宗教的雰囲気にはどうしてもなじめない」と訴えており、大学に対する強い不満を抱いている。

Tm は、一見自己抑制的で礼儀正しく、面接の際にはふし目がちに物静かに話すいわゆる箱入り娘といったタイプの女性である。東京郊外の農村地域に育ち、家が裕福であったため、幼いころからまわりの友だちからは特

別な目でみられていた。また勉強もよくできた。小学中学を通して、学校の先生からはずい分かわいがられ、本人によれば、「実力以上にちやほやされた」そうである。「今でもよく、いい娘さんですねと人からほめられる」と母親はいっている。

大学を卒業したばかりの4才年上の兄がいる。彼は学校時代を通して、常に優秀な成績をおさめてきた。Tm は幼いころから、兄に対する競争心をもやしてきた。「あまり勉強もしないのにできるのでうらやましい。兄は一流大学を受けて全部パスしたのにわたしはだめだった」という。Tm によると、兄は母親の、自分は父親のそれぞれお気に入りだそうである。実際父親は、Tm のことを「目に入れてもいたくない」ほどかわいがってきた。一方母親からは過剰に干渉された。しつけは微に入り細をうがち、つらいことにはしばしばそれが兄との比較においてなされた。彼女が自由に動ける領域は極端にせばめられていた。それでも小学生のころまでは、こうした環境上の問題点をカモフラージュし、母親の期待にこたえるだけの余裕はあった。実際その結果も、まわりの人々の賞讃を受けるに十分価した。しかし、中学に進んだころの彼女は、他人にいろいろ気をつかいすぎる緊張の強い少女になっていた。例えば、先生へのあいさつを忘れたことをいつまでも苦にしているといった具合である。もともと活発ではなかったが、ますます消極的な態度を強めた。中3の時、国語の授業中本を読まされてしくじり、ずい分はずかしい思いをした。その時のショック以来、同じような場面におかれると、動悸が激しくなり声がでなかったり、上ずったりして、落ち着きを失うようになってしまった。学業成績の低下がみられはじめたのは、そのころからである。

ロールシャッパ・テストを施行したところ、16の反応を得た。領域因子としては全体反応が著しく、(W%=88)、その内容も結合的なものが多い。具体的に直接的な環境への関心に欠ける嫌いはあるが、構成力や抽象力にすぐれているといえよう。形態水準も非常に高く(F₊%=100)、しかも3個の優秀形態反応を含む。FM:M=8:2の比率から未熟な面がうかがわれるが、M反応は両者とも優秀形態を伴っている。その他、F, m, FC, Fc, FK, FC, CF, Csym の反応がそれぞれ適度になされており、少なくとも情意面の貧困や知的未分化をうたがうことはできない。Abramsの公式によると、115以上のIQが予想される。なお、「目がつりあがってこわいかおをしている牛(I)」、「たまでうたれて血を流している犬(II)」、「権威のある人がいすにすわって両足を前にズデーとなげだしていばっている(IV)」

等の反応は、Tmの感情状態をよくあらわしているように思われる。テスト態度としては、自信に欠け、「どうもスミマセン」をくりかえすことが特記された。

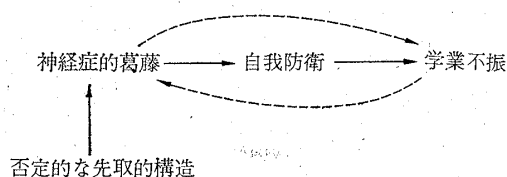
考察：dominantな母親、自分のアイドルのようにかわいがってくれる父親、強制されたモデルとしての兄、そして特別な目で見、ちやほやする友だちや先生等々の存在（圧力）によって Tm は、自律的な真の自我を発達させる余地を著しくはく脱され、一種の虚像のなかにはめこまれてしまった。与えられた正当な発達課題との対決を通して自己の主体性を確立していくという過程は、この虚像、つまりおしつけられた良い子像を守り、維持するといった不毛な仕事にすりかえられた。それをなんとか成就できる間はそれでもよかった。しかし、「自分は何であり何になるべきか」という内的世界の再統合を課せられる時期（青年期）の到来とともに、また現実要求される課題が過重になるにつれて、防衛作用と一定の能力によって維持されてきた虚像も侵されざるを得なくなった。「わたしのことを他の人はどう思っているのだろうか」このことがひどく気かりになる。自分が感じる自分の姿ではなく、他人の眼に映った自分の姿に一方的に心をうばわれてしまう。自意識が過剰になり、強い対人緊張を示すようになる。特に知的な面での評価が為される対人場面はまわりから期待されている自己像と現実の自己像とのずれが露わにされる危険に満ち、Tmにとって大きな脅威である。引っ込み思案になることは、そうした脅威から自己を防衛するための1つの手段であろう。このような機制は、読みかたに失敗した際にみられたひどい混乱にすでに暗示されており、現在の状態像のなかに顕著に示されている。

熱望した大学の入試に失敗したという事実は、特に兄との比較において、Tmに知的弱小感を意識させるものであり、こうした状況に直面することは、賢い良い子像をおしつけられそれに固執してきた彼女にとって耐えられないことであろう。もちろん知的領域を回避することによって問題が解決するわけではない。回避すること、直面することと同様に彼女の良い子像と相入れないからである。「学習の忌避は、防衛的要求を満足させるが、混乱を招くことがある。こうした二重の紐は、われわれの社会において成長するすべての人間の免れない状態でもある（Bruner）。」進退きわまる深刻なジレンマは、不安感情を募らせる一方、生理的次元に反映し種々の身体症状をもたらしているといえよう。

現在Tmは、大学には自ら休学願いを提出し、分析的面接を中心とする心理療法を受けている。

III 総合的考察及び総括

これまでみてきた6事例に共通していることは、学業不振の背景に神経症的葛藤が存在していることである。しかもそれらの葛藤は、rigidな行動的・精神的様態として自我面に定着しており、個々の生活歴・家族力動性との関連においてはじめてとらえることができるものである。ところで Freud, S. (1926) は、神経症的葛藤について「神経症をおこす原因となるような、衝動と超自我、現実間の葛藤の状態におかれるときに、自我が利用するあらゆる手段を防衛という用語でよぶことにする」と述べている。このように定義される防衛の概念を導入することによって、つまり Bruner, J. S. (1966) のことばをかりれば、「人間の知的生活に防衛が投げかける反映に焦点を置く」ことによって、学業不振の諸様相をよりの確にとらえることができるように思われる。そして、「神経症的葛藤が原因で学業不振に陥った」という曖昧な表現から歩を進めて、「神経症的葛藤が何故に学業不振を導いたか」について考えてみることにしよう。



ところで、人間の知的生活の基礎を成している言語や観念過程は、防衛作用のいかなる影響下にあるのだろうか。Dollard, J. & Miller, N. E. (1950) は学習心理学的な視点において、防衛特に抑圧を不安の減少によって強化される言語行動の自動的回避 (automatic avoidance) としてとらえている。つまり抑圧は、回避反応としての思考 (知的活動) の休止であり、このことは結果的に「不安の回避」を導く、と考えられるのである。観念過程の貧困化は、持続的な防衛 (抑圧) 作用によってもたらされる。Freudが強調しているように、抑圧は、1回限りのもしくは完了した活動ではなくて、エネルギーを持続的に消費しつつ常時更新する過程である。従って抑圧は、その程度がある水準を越えているような場合には、広く般化し当初抑圧されていた素材に関連する多くの観念を後退させ、結局一般的な知的減退をもたらすことになる。このことを Holtzman, W. H. と Gardner, R. W. (1959) は、水準化-強調化 (leveling-sharpening) とよばれる認識の形式的特徴との関連において、「記憶要素が相互に同化し融合し、その特殊性が損われるような記憶体系は、……防衛作用の有効な指標としての意義をもち得る」と述べている。Horney, K. (1937) も同

様に、不安の回避を促すものとして「抑制の機能」を重視し、それが精神面にあらわれるとき、精神集中、知的活動が妨げられることを示した。つまりそうした人の自我にとって、進取的な精神活動それ自体が、そのことによって不安が喚起されるという意味で、一種の脅威なのである。以上のように、防衛の働きによって知的潜在力の効率が妨げられてしまうことはすでに明らかにされているが、ここではより巨視的なレベルで、学習課題への接近に抵抗して防衛をもくろむ行為について考えてみたい。

先にみた発達心理学的な観点から防衛のモデル様態をとらえようとするとき、それがすでに以前の段階で先取りされていること、つまり防衛的な認知や行動が以前の環境やその他の条件ですでに支配的になっていることが分かる。Bruner は、このような現象を「先取的隠喩 (preemptive metaphor)」ということばでよび、示唆に富む所論を提出した。

「人間は学習の因果的な過程に身をゆだねることはできない。」Bruner によるこの視点は、人間の知的生活を云々する際に欠くことのできない前提であろう。人間は単に環境によって条件づけられるのみではなく、自らの「創造 (invention)」を主張する。Bruner は人間存在のもっとも特徴的な面として、「学習する意志」をあげている。彼によれば、ほとんどすべての子どもは内発的 (intrinsic) とよばれる動機、つまり陽気な楽しみのためにことを処理しようとする傾向を有しており、後日の知的活動のありかたは、この動機の原型である未分化な好奇心がより強力かつ知的な探究心へと切りかえられるか否かにかかっている。従って、受動的・感受的・偶然的

な好奇心の形態から、持続的かつ能動的なそれへの移行が必要になるのである。このような移行過程は自我の発達という視点から、信頼 (対不信) から同一性 (対同一性混乱) までの自我の過程としてとらえることができよう。そうすることによってはじめて、課題の諸要求に積極的に「対処」する行為 (conflict free process) と、課題の接近に抵抗して「防衛」をもくろむ行為 (conflicting process) が明らかにされる。なぜなら、これらの相反する傾向を以前の発達段階において支配的であった positive なまたは negative な先取的構造の反映としてみるからである。Table 1 は以上の見解をまとめたものである。

Ya はその幼児期を通して、自分の遊戯能力を確かめる模型をもつことができなかった。Ya の無邪気な欲求を抑制しようとした母親の態度は、彼女の緊縮的な自我特性として取り入れられ、環境世界への進取的対処を避けようとする防衛様態をもたらした。無邪気な欲求—それが未知なるものへの好奇心を促す基本的資質であるとしても—は、多忙な母親にとって、そしてその必然として娘 Ya にとって、いまわしいものにすぎなかったからである。しかるに学習を遂行しようとするとき、教えられたことや読んだことをただ記録するだけでは不十分である。それらを積極的に組織化し、それ以上に突き進む努力が必要になる。与えられた学習課題を避けようとする Ya の防衛的傾向 (学業不振の状態) が、彼女の乳幼児期にみられた環境との関わりかたのなかにすでに先取りされていることが理解できよう。Iu, Km, Ca, Tm についても同様のことがいえる。Iu の「先生の話を開こ

Table 1 各発達段階で基礎づけられる学習の様態

	口唇感覚時代	筋肉肛門時代	運動性器時代	潜在期	青年期
〔成功〕 葛藤過程をまぬがれた様態	〔信頼〕 機能的統一の構成。 全ての「うまくやる能力」の基礎。	〔自律性〕 適度の自己操作。 例えば、学習過程に生じる欲求不満による情緒的反応の適切な操作。	〔進取性〕 自発心・好奇心の強化。 自らの楽しみのためにする内発的学習の促進。	〔勤勉〕 世界を支配する現実的法則への適応。例えば、知的活動を高く評価する人との同一化。	〔同一性〕 従来のテーマに関連する構成要因の再検討と統合。 知的活動における役割の適切性・一貫性の維持。
〔失敗〕 葛藤過程を含む様態	〔不信〕 自らに閉じこもることまたは、衝動的で非現実的な近道反応。	〔疑惑・恥〕 だらしのないまたは強迫的な学習態度。	〔罪悪感〕 内面化された障壁による抑制傾向。	〔劣等感〕 学習事態からの逃避。 粘り強さの欠如。	〔同一性混乱〕 学習することへの無意味感。 集中力の欠如または一方的な活動への自己破滅的な没入。

うともしないし、自分の思っていることを言おうともしない」といった態度の先取的隠喩は、未統制な人間的刺激の過多、溺愛のおしつけに対する防衛的な保持様態にみることでできよう。Km に特徴的な内にとじこもりやすい傾向や ambivalent な心理葛藤は、より悲劇的なかたちで、母性をなくした不幸な母親との不幸な関係のなかに先取りされている。Ca や Tm の場合は、彼らの年齢が示唆するように、より複雑である。Ca の状態像の原型は、基本的には自律自発性の確立を妨げた幼児期からの環境のありかたにみることができる。独力でことを為すことを要求される学習事態に直面するとき、困難な現実を避け安着できる先取的隠喩との融合（退行）をはかるようになったのもそのゆえんであろう。また、Tm に特有な様態は母親の過剰干渉を基点とする他者のまなざしのなかで決定され、歪められてきたといえよう。彼女にとって知的面の評価が為される状況は、幼いころから期待され強制されてきた自己像と現実の自己像との亀裂がしばしば露わにされる脅威場面である。引っ込み思案はこうした脅威に対する防衛傾向のあらわれであるといえよう。以上の観察から次の Bruner によることばが明らかになるであろう。

「防衛を支持し、対処を実質的に不可能にするような学習の基礎となっているのは、先取的隠喩のほとんど癌のような成長である。」

ところで、Ak にみられた状態像は、以上とは異なった観点からとらえられよう。先取的隠喩の発想は字義の通り、先取りされた構造を包含する状態像を問題にするときにのみ有効である。しかるに彼は、発達の比較的初期の段階にある。彼に特徴的な防衛の様態及びそれに由来する知的減退はしたがって、彼をとりまく直接的な環境によって、つまり、正当な甘えを拒否し一方的な structure のおしつけをもくろんだおとなたちの育児観によってもたらされたといえよう。このように考えることは、治療実践の上できわめて重要である。なぜなら、「小児の神経症は、そのほとんどが環境反応型の……いわゆる周辺神経症だといってよい（黒丸正四郎 1959）」といわれていることから明らかなように、一般的には年齢が低ければ低いほど母親面接（いわば環境調整）の効果の高まることが期待されるからである。

ここで、忍耐や努力の特性について触れてみよう。Ya の知能検査や Km のロールシャッハ・テストの施行時にみられた彼らの「忍耐・努力」が何故に「緊張・疲労」をともなっていたのであろうか。こうした神経症的な背景をもつ努力と真の勤勉感に基礎を置いている生産的な努力とでは、いかなる面において異なるのであろう

か。心的エネルギー論の観点から次のことがいえるだろう。学習遂行時における心的エネルギーは、学習への「対処」にのみ充てられるのではなく、抵抗をもくろむ「防衛」のためにも費やされるのである。従って、正常な対処を妨げようとする強い防衛が働いている場合、実質的な遂行を強制されるとしたら、正常の場合とくらべて倍以上のエネルギーを要することになる (Fig. 1)。

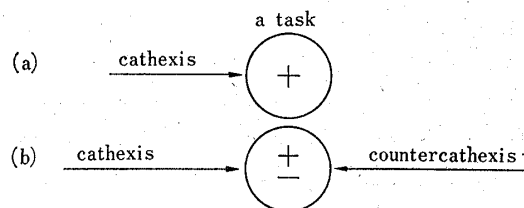


Fig. 1 学習遂行時に充てられる心的エネルギーのベクトル

こうした「対処」と「防衛」のもつれ、いわば cathexis vs. countercathexis のあつれきは、神経症的な人の学習活動を特徴づけているように思われる。勉強をはじめてもすぐに疲れてしまう、努力の割には成果が少ないといったタイプの学業不振の状態像は、こうした機制によって説明されるのではなからうか。彼らへの臨床的働きかけは、弱化した防衛的自我を再び健康にし、その

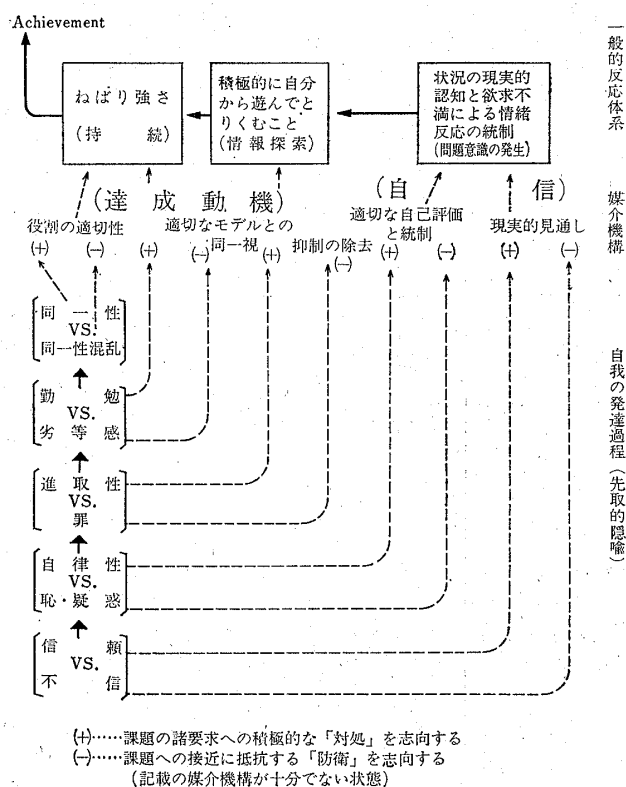


Fig. 2 学習課程を促す要因の発達の構造（仮説）

中性化機能 (neutralization function) を回復させることに意義があるように思われる。

これまでの所論で筆者は、学業不振の背景に、神経症的葛藤に由来する防衛作用を想定し、しかもそれらが自我発達の力動性、いわば先取的隠喩 (発達の初期においては直接的環境) との関係においてとらえられることをみてきた。

Sears は学習過程を導く媒介機構として、現実的見通し、適切な自己評価と統制、抑制の除去、適切なモデルとの同一視、役割の適切性等々をあげている。これらの特性は、学習が遂行されているまさにその時点において作用する要因及びその基礎になる資質とみられているが、これまでみてきたような観点から、その縦断的構造への理解を深めることができるように思われる。Fig. 2 は、自我構造の適切な発達が、学習遂行に欠かせない媒介機構を保証している様相を図示したものである。つまりこの仮説は、個々の学習の正常な遂行は、life history というひとつの大きな課題を解決することによって得られる素地 (媒介機構) を前提にしていることを示唆するものである。

文 献

- Abrams, E. N. 1955 Prediction of intelligence from certain Rorschach factors. *J. clin. Psychol.*, 11. 81—83.
- Bruner, J. S. 1966 Toward a theory of instruction. Harvard University Press. Cambridge, Massachusetts. (田浦武雄他訳 教授理論の建設 黎明書房)
- Bruner, J. S. (editor), Sears, R. R., Kagan, J., Mussen, P. H. et al. 1966 Learning about learning. Office of Education, U. S. Department of Health, Education and Welfare. (塩田芳久他訳 学習についての学習 黎明書房)
- Despert, J. L. and Pierce, H. O. 1946 The relation of emotional adjustment to intellectual function. *Genet. Psychol. Monogr.*, 34.
- Dollard, J. and Miller, N. E. 1950 Personality and psychotherapy. New York, McGraw-Hill.
- 江口恵子その他 1965 学業不振児の治療教育に関する基礎的研究・教心第七回総会発表論文集。
- Erikson, E. H. 1950 Childhood and society. W. W. Norton & Co., New York. (草野栄三良訳 幼年期と社会 日本教文社)
- Erikson, E. H. 1968 Identity: youth and crisis. W. W. Norton & Co., New York. (岩瀬庸理 主体性：青年と危機 北望社)
- Freud, S. 1926 Hemmung, Symptom und Angst. Wien. (井村恒郎他訳 フロイド選集 不安の問題 日本教文社)
- Hartmann, H. 1958 Ego psychology and the problem of apperception. International Universities Press, Inc., New York. (霜田静志他訳 自我の適応 誠信書房)
- Holzman, P. S. and Gardner, R. W. 1959 Leveling and repression. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 59. 151—155.
- Honzik, M. P. et al 1948 The stability of mental test performance between two and eighteen years. *J. exp. Educ.*, 17. 309—329.
- Horney, K. 1937 The neurotic personality of our time. W. W. Norton & Co., New York. (吉田斧子訳 ノイローゼ新しい精神分析の基礎 岩崎学術出版社)
- Kagan, J. et al 1958 Personality and IQ change. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 56. 261—266.
- 黒丸正四郎 1959 子供の精神障害 創元社
- Lorand, R. L. 1961 Theory of learning problems: Adolescents-psychoanalytic approach to problems and therapy. New York, Hoeber Medical Division Harper and Row.
- Maier, H. W. 1965 Three theories of child development. Harper and Row, New York.
- Norfleet, M. A. 1968 Personality characteristics of achieving and underachieving high ability senior women. *J. Personel & Guidance*, 46(10), 976—980.
- Ribble, M. A. 1943 The rights of infants: Early psychological needs and their satisfaction. Columbia University Press, New York. (津守真他訳 乳児の精神衛生 法政大学出版局)
- Sheldon, W. D. and Landsman, T. 1950 An investigation of nondirective group therapy with students in academic difficulty. *J. consult. Psychol.*, 14. 210—215.
- Sontag, L. W. et al 1958 Mental growth and personality development. *Monogr. Soc. Res. Child. Devel.*, 23. No. 2.
- Sutherland, B. K. 1952 The sentence-completion technique in a study of scholastic underachievement. *J. consult. Psychol.*, 16. 353—358.
- 高木四郎 1964 児童精神医学各論 慶応通信

Teigland, J. J. et al 1966 Some concomitants of underachievement at the elementary school level. *J. Personnel & Guidance*. 44(9). 950—955.

Wilson, M. R. et al 1967 Underachievement in college men. *Psychiatry*, 30(2). 180—186.

(1970年9月25日原稿受付)

ABSTRACT

AN EGO-PSYCHOLOGICAL APPROACH TO UNDERACHIEVEMENT

—Case Studies on Learning Blocks as Ego-Defense—

by

Shoji Yabuki

Tokyo University of Education

What are the personality factors which characterize an underachiever? The author looks into this problem from the viewpoint of psychoanalytic ego psychology. He considers 7 case studies of underachievers troubled with neurotic conflicts. That which is called a healthy underachiever is beyond the limits of this study. The hypotheses from this study are:

- 1) Using the concept "ego defense", we can answer the question "Why do neurotic conflicts bring about underachievement?" whereas before, the expression "Neurotic conflicts bring about underachievement," didn't solve any basic problems.
- 2) For someone with a certain type of defensive ego structure, it is a threat to be also endowed

with a high will to learn, because he must meet new situations which create anxiety.

- 3) The way that the ego defense mechanism urges him to avoid the learning situation, is a distinctive mode which helped him deal with his formative experiences.

- 4) Therefore, from the viewpoint of the theory of ego development, the typical crises of the ego structure at each developmental stage may be recognized as important contributing causes in influencing the learning process; and the crises help determine whether the process is positive or negative, positive being a coping response and negative being a defensive response.